

研究ノート

概念と実践からみる近代日本の美育

小 出 治都子*

[序章]

美的教育（以下、美育）とは、「感性と理性の両面をふくむ人間性そのものの育成を意味する」¹ものである。「本来的にはシラー的な意味における人間教育を意味」している美育概念は、明治30年代にその概念を論じられるようになった。その先駆者のひとりであり、シラーの美的教育論に大きく影響を受けた教育学者が小西重直であることを、前田博は述べている²。

シラーの美的教育論とは、「美はけっきょく感性と理性の合致における人間性の表現とされるゆえ、美や芸術にもとづく情操教育は、実はただちに人間性の育成を意味するものでなければならず、逆にいえば、人間教育は根源的に美や芸術による美的教育でなければならない」³という論である。シラーは、感性を「形式的衝動」、理性を「素材衝動」とし、この2つが互いに対立しているとした。そして、この対立を調和するものが美的体験における「遊戯衝動」であるとしている⁴。

小西重直は、このシラーの美的教育論を、1906（明治39）年の「趣味教育に就いて」と題した講演や、1908（明治41）年の『学校教育』（博文館）などの著書に引用している。渡部周子は、前田が論じた小西の美育論をさらに分析し、「普通教育の一分野として美育を位置づける試みは、明治三〇年代に行なわれたのだとしても、幼児教育では明治一〇年代に、女子教育では明治二〇年代から三〇年代初頭にはすでにその重要性が認識され提唱されていた。さらに、普通教育での美育が情操教育を意図するものであったのに対し、女子教育での美育は容貌を美しく育むことを意図するものとしてその機能を変えたのであった。」⁵と述べ、女子教育における美育の特異性について考察している。さらに、「一九〇五年に小西重直がシラーに依拠した美育を提唱するまで、普通教育の一分野として美育を位置づける試みは充分に行われていなかった」⁶とも述べている。

しかしながら、小西が提唱した美育論は、普通教育や中等教育といったカテゴリーに分けて論じたものだけではない。1932（昭和7）年の『家庭教育』（『岩波講座 教育科学（一〇）』、岩波書店）など、学校教育以外の場での美育についても論じているのである。そのため、小西の美育論は学校教育のみに特化したものと捉えるのではなく、美育をいかに教育界に浸透させるかを重点においたものと捉えるべきだろう。

また、美育についての先行研究を見ると、シラーのみに依拠したとはいえない。前田は、小西と同時代の教育学者である、大瀬常蔵と森岡甚太郎を取り上げ、彼らがドイツの哲学者、レーマンの美育論に影響を受けていたことを論じている⁷。さらに、近年の研究では、赤木里香子がヘルバルトの理念を取り上げ、道徳的判断を導く美的判断力、さらには、その基礎となる美的感覚や感情を育てるという目的があったことを論じている⁸。また、石井慎一郎はニーチェの教育思想に着目し、明治期から大正期の美育論や芸術教育論に与えた影響について論じている⁹。

これらの先行研究が示しているように、近代日本における美育論は、西欧、とくにドイツの美育論が取り入れられている。その理由のひとつが、明治30年代にドイツで起こった芸術教育運動である。小西はこの時期、ドイツに

キーワード：美育の概念、美育の実践、児童博覧会、近代日本

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 表象領域

留学しており、芸術教育運動を目の当たりにしている¹⁰。

もうひとり、この芸術教育運動を体験した人物がいる。児童文学者の巖谷小波である。1900（明治33）年から渡欧していた巖谷は、1901（明治34）年にベルリンで行われた「児童教育画展覧会」を見学し、その報告をしている¹¹。巖谷は、ドイツの芸術教育運動と児童文化の運動を、日本にも取り入れ、児童文化を発展させようとした。その具体的な案として、三越の児童博覧会の企画し、1909（明治42）年の開催に至るのである。

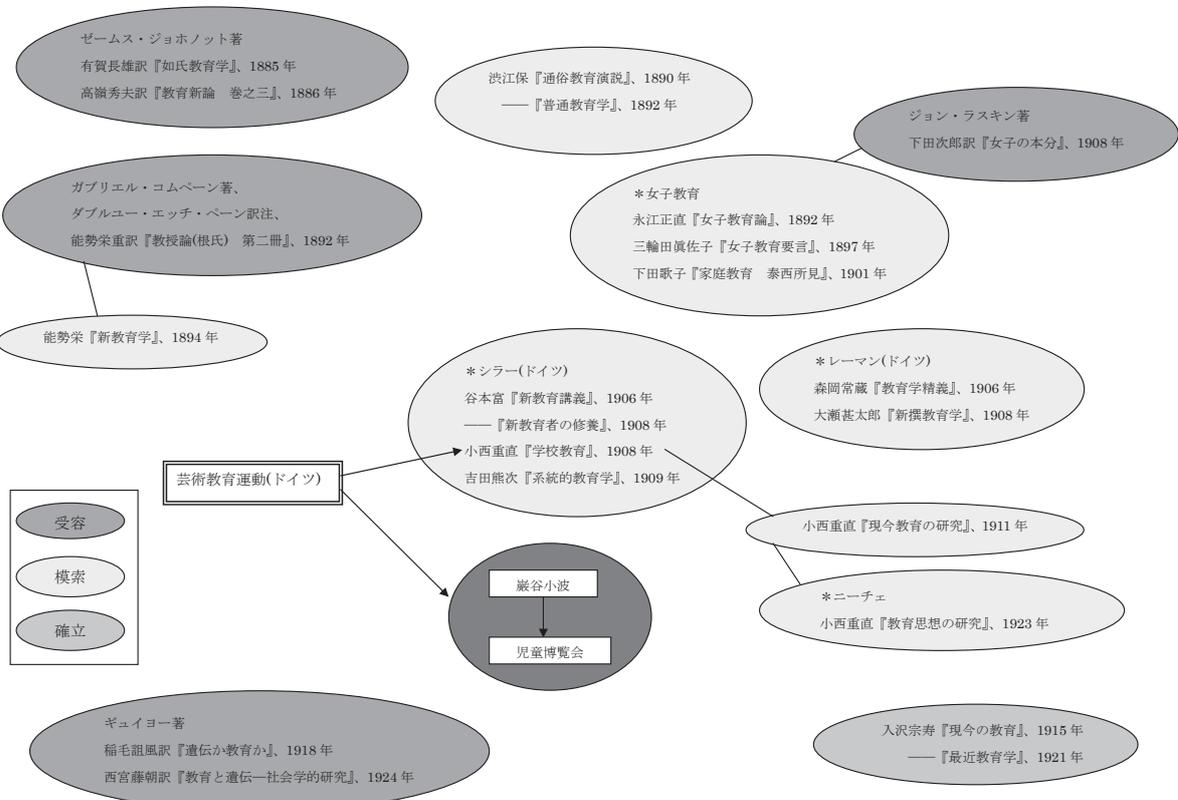
ドイツの芸術教育運動を体験した小西と巖谷の日本での動きは、まさに両極端であったといえる。小西は教育界に美育という概念を定着させようとし、巖谷は美育の実践の試みとして、児童博覧会を企画した。これらの事柄は同時期のことであり、赤木が論じる「制度化を完了した学校と図画科が美的教育の機能を失いかけたとき、大衆消費社会の発現を象徴する博覧会という形式が、児童のための趣味教育の媒体として浮上」¹²したという考察とは相違がみられる。

そこで、本稿では、教育界における美育論と、同時代の社会における美育論を考察することを目的とする。本稿の構成としては、まず、教育界における美育の歴史を受容期、模索期、確立期にわけ、それぞれの時期の美育がいかなるものであったかを論じる。先行研究における美育は、個人の思想を中心に語られ、時期区分して語られたものは、現在論者が知るところでは、あまりない。そのため、本稿では美育を時期区分して論じることとする。

次に、模索期における社会の試みとして三越が開催した児童博覧会について考察する。本稿では、1909（明治42）年の第1回児童博覧会と、1910（明治43）年の第2回児童博覧会に着目し、その類似点と相違点を分析しながら、美育の試みとしての児童博覧会がどのように機能していたかを論じる。

【第一章】

まず、美育の流れについて図に表わした。それが図1である。そうすると、次のようなことが見えてくる。



<図1>

1. 外国の美育論を翻訳し日本に受容したもの
2. 日本に合致した美育を模索したもの
3. 日本における美育が定着し、教育以外の美育概念を考察したもの

これらの時期を 1. 受容期、2. 模索期、3. 確立期と称し、それぞれの時期の時代背景と特徴を考察する。

図を見ると、受容された美育は、明治 20 年代、明治 40 年代、大正期に登場していることが分かる。明治 20 年代に受容されたのは、アメリカのゼームス・ジョホノットの美育である。受容された文献の中で、美育について書かれていた初めての文献である。このジョホノットの美育は、以下のようなものである。

美育ハ音ニ美ヲ鑑識スル能力ヲ養成スルノミナラズ、又美ヲ創造スル能力ヲ養成スルモノナリ。¹³

しかし、前田が論じているように、ジョホノットの美育論は定着しなかった¹⁴。
その後、フランスのコムペーレの美育論が翻訳された。

而シテ美育ハ其ノ最廣キ意味ニテ云ハズ、凡ベテ天工及ビ人工上ノ諸美ノ測量、文學ノ嗜好、音楽ノ快樂、模造術ノ知識及ビ他人ノ工作ニ備ハル所ノ美ヲ感ズルコトヲ得ルノミナラズ、自己ノ工作ニ依リテ美ヲ實現スルコトモ爲スコトヲ得ル所ノ種々ノ才能ヲ包含スルモノナリ。¹⁵

コムペーレの美育論も、ジョホノットと同じように、美育を 2 つの要素で成り立っているとしている。国が違って、日本に受容された美育概念は同じであり、一様に、美を鑑賞する能力と美を実現する能力（美術作品を作る能力）の養成が必要であることを述べている。日本において受容された美育概念に相違がないにも関わらず、なぜ美育は日本の教育に定着しなかった理由について、前田が述べているとおりである¹⁶。

こうした状況において、明治 40 年代に、イギリスのジョン・ラスキンの美育論が受容された。この文献を翻訳したのは、女子教育者の下田次郎である。

女子の教育において、第一に行ふべき事は、體育なり。體育の目的は、単り身體を健全ならしむるのみならず、その美を完成するにあり。女子の美を最高度に發達せしむるには、立派なる體力を養ふと共に、其動作を優美ならしむること肝要なり。¹⁷

下田は、美を得るためには体力及び動作が優美であることが必要であるとし、女子教育における体育の重要性を示唆した。ここで、それまでの受容された美育とは違った視点を見ることができる。明治 20 年代に受容された美育概念は、美を鑑賞する能力、美術作品を作り出す能力を養うことを目的としていた。それに対し、明治 40 年代に受容された美育は、美育だけでなく、それ以外の教育概念との関係性をもって語られることとなったのである。もちろん、下田が訳した『女子の本分』は女子教育に特化したものであり、教育全般に対して言えるものではないだろう。このことに関しては、さらに研鑽を積みねばならない。

だが、少なくとも、美育概念のみを述べるのではなく、その他の教育概念との関係から美育を論じるようになったことは確かである。

大正期においても、ギュイヨーの美育を翻訳したように、外国から受容されていた。このように、美育は、明治・大正期ともに受容された。しかし、受容された文献が多いのは、やはり明治 20 年代あたりであり、この受容期があったからこそ、次の模索期に入ることができたのである。

美育の模索は、主に、明治 30 年代から 40 年代にかけて行われた。明治 30 年代は、高等女学校令によって女子教育が盛んになった時期であり、下田歌子や三輪田眞佐子など女子教育者による文献を多数見ることができる。

また、シラーやレーマンなど、ドイツの美学者の考えを通して、日本における美育のあり方を模索した小西や、吉田が登場する時期でもある。小西の美育論については、後で詳説するため、その他の美育論を考察する。特に、「西

の小西、東の吉田」と称された吉田熊次は、小西と同じくシラーの美的教育論に拠った美育論を展開している¹⁸。その中で、当時の日本の美育について以下のように述べている。

美と云うふのは、主観に気に入ることである。自分の気に入ったものであるならば、如何なる内容を有つて居るものでも、美は則ち美である。…それを見て面白いと感じ、美しいと感ずれば、それが美であると云ふ風に見る……………これが即ち輓近の思潮であります。¹⁹

受容期の美育との相違点は、美の概念をそのまま受容するのではなく、主観による美の概念の形成を論じていることといえよう。

また、「此美育の如きは、学校教育其物のみにては決して十分に出来上げることの出来ぬ性質のものであつて、矢張り社会と相須つてするでなければ、完全に其効を奏することが出来ぬのであります。」²⁰とも述べており、学校教育における美育の限界と、社会における美育との連携を指摘している。

このように、日本における美育は翻訳による受容と、日本におけるあり方を模索した結果、大正期にその確立を図ることができたといえる。それは、前田が論じているように、大正期は日本における芸術教育運動が最高潮に達する時期であった²¹。確立期に刊行された文献として、近代教育思想の研究者である入澤宗寿の著書『現今の教育』が挙げられる。この中で、入澤は確立された美育の問題点について述べている。

併し藝術論者が美的着眼を美育以外にもおし擴めやうとする傾向には賛同し難い。科學と藝術とはどちらも必要であるが、相侵してはいけない。勿論教授と訓育とに美的藝術的要素の這入つて來る點も認めないでは無いが、近時の傾向はむしろ認め過ぎて居ることを主張せざるを得ぬ。²²

美育が確立されたのち、美育の目的である美を鑑賞する能力、美術作品を作る能力がその範囲を超え、他の領域に踏み込んでしまったといえる。入澤の指摘は、その警告であるといえる。また、「美育は國家の文化的方面、産業的方面、經濟的方面とも密接なる關係を生じて來るものであるから、活きたる社会生活の要求よりして其勢力を持つに至つたのである」²³と指摘からも、確立された美育が、その目的を教育だけでなく、当時の社会全体に影響を及ぼしていたといえるのである。

[第二章]

第一章で分類した三つの時期のうち、小西重直（1875年 -1948年）は模索期に美育を論じた教育学者の一人である。小西は、1902（明治35）年から1905（明治38）年までドイツに留学した。そのさいに経験したのが、芸術教育運動である。この経験と、「恩師」フォルケルトとの影響によって、日本における美育定着に奔走することとなる²⁴。ドイツから帰朝したのちの小西が、「趣味教育に就いて」と題した講演の中で、美育を論じたのは1906（明治39）年のことである。そして、1908（明治41）年に刊行した『学校教育』において、美育の重要性を説いている。

『学校教育』において、小西は審美的情操として美育を以下のように論じている。

審美的情操

此情操は美に對して、快、安心、平和を感じ此を賞し醜に對して不快不安緊張を感じ此を退くつての精神状態である。蓋し美は多様の統一である。諸要素の調和の状態である教育一般より見れば美か教育上價值あるのは美感の高尚なる國民の美術工藝品は立派であつて國の經濟力の増進を促し又國民の野卑なる欲望を高尚にする、品性を麗はしくする點であるが訓育上に於ては最初の經濟力増進に關しては寧ろ間接の關係であつて後の方の徳性に關する事が直接である。²⁵

ここから、小西が美育を単に美術工藝品を作るために必要な教育ではなく、品性を養うために必要であると考えて

いたことがわかる。それは、受容され、翻訳された美育論とは違っている。翻訳されたものは、美を鑑賞する能力を養うことよりも、美術工芸品をつくる能力を重視するような記述がされているものが多い。

そこで、この美を鑑賞する能力及び、美術工芸品を作る能力を養う教科である図画に着目し、当時の小学校教育に着目し、教育カリキュラムではどのくらいの時間を図画に当てていたのか、また、それによって美育概念は養えたのかを考察する。

1886（明治19）年、小学校令が公布され、さらに「小学校ノ学科及其程度」が公布され、小学校教育の内容に関する基準が示された。『学制百年史』に記載されている尋常小学校の教科目別週間教授時数をみると、図画は、1891（明治24）年の高等小学校において2時間となっている。読書、作文、習字が合計10時間を越え、唱歌や体操が5時間あることを考えると、図画の時間が極端に少ないことが分かる²⁶。

しかし、1907（明治40）年になると、高等小学校において図画の時間が3時間と増え、体操と同じ時間数の教育がなされている²⁷。それ以降の図画の時間数は変わっていない。ここから、明治30年代、40年代に美育に関する大きな変化があると考えてよいだろう。その一つの仮説として、前章であげた模索期における美育の展開を挙げる。模索期に、近代日本独自の美育を模索したことにより、美育に関する多くの文献が刊行されたといえよう。その中で、学校教育の美育に関して谷本富が次のように述べている。

尚ほ教育上では美育を分けて二つにする事が出来ず、それは第一は美術を作るの能を養ふ事で、第二は美術を愛玩するの能を養ふ事である、就中第一の美術を作る能を養ふ事は申迄も無く第一、圖畫の科に據り、第二音楽、第三が手工に據りませう、此の三つは各々特別の目的があると同時に、美感を養ふ事に於て必要なる事は現行の教則にも書かれてあるから反復しません、而して又第四に躰操は美術製作の能を養ふ一つであると云ふ事は一言を要しませう、蓋し躰操の目的は啻に身軀を健康にするばかりでなく尚且つ身軀を美しくするものであつて、美容と云ふ事は一時喧しかつたが、如何にも躰操は人をして美容ならしむるものであり升、醜くするのでは無くて躰を美しくするのであるから、之れも亦確に美育の一つである、即ち圖畫、音楽、手工及び躰操の四つに依つて美を造らんとするのである、²⁸

谷本の論から、学校教育における美育の教科を具体的に知ることができ、また、美育概念に基づいた教科がこの頃、規則として整備され、学校教育に浸透していたことを指摘することができる。

もう一つの仮説は、1906（明治39）年から度々行われた児童博覧会の存在である。児童博覧会は美育の実践の試みとして存在していた可能性があるためである。そこで、次章では、児童博覧会の中でも盛況だった三越主催の児童博覧会について考察する。

[第三章]

三越主催の児童博覧会は、1909（明治42）年に開催された。この児童博覧会を企画したのは、巖谷小波である。

巖谷小波（1870-1933）は、明治から昭和前期に活躍した児童文学作家である。巖谷が1900（明治33）年から1903（明治36）年頃までドイツに留学していた。その経験をまとめた『洋行土産』の中で、ベルリンで開催された「児童教育畫展覽會」について述べている。そして、「さして澤山は無けれども、兎に角その種類を分けて、而も順序よく排列してあるには、流石に感服せざるを得なかつた。」²⁹と評している。この「児童教育畫展覽會」は、三部に大別されており、第一部には「學校及家庭用の壁畫掛圖の類」、第二部には「児童用の繪畫お伽噺」、第三部には「児童其者の手に成つた、種々の圖畫」が集められていた。その中でも、巖谷は第三部の展示について、「心理上、教育上、大いに参考と成るべき物である。」³⁰と賞賛している。それに対し、日本については以下のように述べている。

然し残念ながら我邦では、まだこの様な會を開く事が出来ぬ。否、開いて出来ぬ事は無いが、まだ誰も思ひつかぬのである。あゝ世の児童教育家諸君、せめて教育博物館の一部分にでも、この種の展覽會を開いては如何か。頃日漸く美育の聲を聞く。我は美育の第一手段として、我邦にこの會の起らん事を、切に希望する者である。³¹

この記述から、日本において児童の作品を展示する場がなかったこと、それを今まで思いついた人物がいなかったこと、そして、日本にはまだ美育が定着していなかったことが分かる。この記述は、1901（明治34）年のことであり、ちょうど美育が模索期に入った時期であり、まだ小西重直はドイツに留学しておらず、美育に関する文献も書いていない。

巖谷は、この体験をもとに、日本に帰って後、児童博覧会の開催に向けて準備を進める。この巖谷が1909（明治42）年に三越主催の児童博覧会を企画するまでに、1906（明治39）年、「こども博覧会」が同文館主催で行われた。この博覧会は、パリで開催された「こども博覧会」を見た沼田藤次、樋口勘次郎の発案によって企画されたものであった³²。

しかし、この博覧会を見た巖谷は次のような言葉を述べている。

其多くは児童の製作品を中心としたるものにて、規模もまだ甚だ大ならず、斯道奨励の一助とはなりつらんも、未だ以て児童をして娯樂と實益とを併せ修むるの機關に乏しきを遺憾としぬ。³³

さらに、「こども博覧会」での出品に対して審査がなかったことに対して不満を表わしている。巖谷自身、「こども博覧会」に出品をしており、出品物に対して「審査を行い、褒むべきは褒め、貶くべきは貶け」ないといけないと論じている³⁴。

しかし、巖谷はドイツでの「児童教育畫展覽會」について述べているときに、児童の作品が展示されているのを鑑賞して、日本でもこのような場を設けねばならない、としていた。同文館は、まさに巖谷の言葉通りの博覧会を行ったといえる。だが、巖谷にとっての児童博覧会は、「児童そのものを陳列し、若しくは児童の製作品を陳列するものに非」ざるものであり、「児童の必需品を廣く蒐集陳列するもの」であった。つまり、巖谷の考える児童博覧会とは、児童の作品をただ陳列し鑑賞するのではなく、そこに審査を設け表彰するという形をとること、そして、生活必需品である衣服や調度品、玩具を展示、鑑賞することによって、教育だけでなく生活の中においても美的感覚を養うことを目的としているのである。巖谷が述べた「美育の一手段」としての児童博覧会は、このような目的を持って実践されたのである。

ここに、教育における美育と、実践としての美育に相違があることが指摘できる。教育における美育は、美を鑑賞する能力、美術作品を作り出す能力を養うことが目標とされていた。

しかし、美育の実践の試みとして巖谷が企画したのは、美育を受けた児童の美術作品を展示するだけのものではなかった。美育を教育のみのものではなく、家庭生活においても重視すべきものとしたのである。それは、吉見俊哉が指摘しているように、この博覧会の着眼点が、児童の作品展示ではなく「児童が購入すべき商品」を展示し、生産者ではなく消費者としての児童であったということである³⁵。また、神野由紀は、三越の社会貢献として児童博覧会が行われたことを論じ、「博覧会という形式をとったことで、商品による別世界の創造が一段と進行し、多くの人々をそこに巻き込むことができるようになった」と指摘している³⁶。

このように、三越が主催した児童博覧会は、単なる美育の実践にとどまらず、美育を教育だけにとどまらず、家庭生活や商業（特に、玩具など児童向け）にまで持ち込む結果となったといえよう。

[終章]

以上、美育を受容期、模索期、確立期に分け、それぞれの特徴を論じた。その中でも、模索期における美育の動きは重視すべき点である。教育においては小西重直が、同時代の社会においては巖谷小波が日本における美育定着に努力したためである。両名はともにドイツ留学しており、そこでドイツの芸術教育運動を経験した。この芸術教育運動の経験から美育の重要性を認識したことにより、小西は『学校教育』などによって教育界にその概念を定着させようとし、巖谷は美育の実践の試みとして、三越主催の児童博覧会を企画した。

しかし、両者の美育概念とその目的には相違点が見られる。小西の美育論はシラーに依拠したものであり、また他の教育者が論じるように、美を鑑賞する能力、美術作品を作る能力を養うことを目的としたものである。それに

対し、巖谷が目指した美育は、美術作品を作り、展示する学校教育だけでなく、家庭や社会における美育の定着を目的としたものだった。それは、児童を美の生産者であり、消費者にすることを意味していた。

このように、美育はその模索期において、教育界だけでなく、当時の社会においても重視された概念であった。そして、教育における美育の概念と、社会における美育の実践の試みによって、近代日本における美育の定着化は進んだのである。

注

- 1 下中直也『哲学事典』、平凡社、1971年、p.1151
- 2 前田博『ゲーテとシラーの教育思想』、未来社、1966年
- 3 前掲『哲学事典』、p.1151
- 4 Schiller, Friedrich von ((1795) 1943), "Über die ästhetische Erziehung des Menschen, in einer Reihe von Briefen," Schillers Werke, 44 Bde., Weimar: H. Böhlau. (= 浜田正秀訳『美的教育論』玉川大学出版部、1982年)
- 5 渡部周子『「少女」像の誕生—近代日本における「少女」規範の形成』、新泉社、p.97
- 6 同上書、p.94
- 7 前掲『ゲーテとシラーの教育思想』、pp.88-89
- 8 赤木里香子『明治後期における児童の発見と美的教育論の形成—「趣味」と「芸術」のあいだに—』、『アート エデュケーション』No.26、建帛社、1996年
- 9 石井慎一郎『日本の教育思想とニーチェ—美育あるいは芸術教育について—』、『外国語教育論集第26号』、筑波大学外国語センター、2004年
- 10 前掲『ゲーテとシラーの教育思想』、p.84
- 11 前掲『明治後期における児童の発見と美的教育論の形成—「趣味」と「芸術」のあいだに—』、p.48
この中で、赤木は巖谷が見学報告した「児童教育画展覧会」をベルリン分離派が組織した「子どもの生活の中の芸術 (Die Kunst in Leben des Kindes)」展であったと指摘している。
- 12 同上書、p.56
- 13 ゼームス・ジョホannot著、高嶺秀夫訳『教育新論 卷之三』、1886年、p.448
- 14 美育が定着しなかった理由として、前田は以下のように論じている。(前掲『ゲーテとシラーの教育思想』、p.80)
美が独自の価値として認められ、教育価値の中にも位置を占めるようになるということである。学問や道徳についての研究とともに美や芸術についての研究がさかんになってくると、芸術がさかんになり、また人びとの生活において美の享受が位置を占めることができる程度に社会の秩序がととのい生活が豊かになってくる必要がある。
- 15 ガブリエル・コムペーレ著、ダブルユー・エッチ・ペーン訳注、能勢栄重訳『教授論 (根氏) 第二冊』、金港堂、1892年、p.241
- 16 註14参照
- 17 ジョン・ラスキン著、下田次郎訳『女子の本分』、金港堂、1908年、p.61
- 18 吉田熊次『系統的教育学』、弘道館、1908年、p.613
吉田はシラーの美的教育論の解釈を以下のように述べている。
シルレルの考から言へば、美と云ふものは一切を包含して、而もそれ等一切を理想化したるものでありますからして、眞も善もこれに總て含まれて行く譯であります。若し斯の如く美と云ふものを解するならば、美育と云ふことが教育の終局、教育の理想であつて宜いと云ふことは言ふまでもない。若し美育と云ふものをシルレルの如くに解釋しまするならば、今日と雖も美育は教育の理想であると斷言して少しも差支へないと思ふのであります。
- 19 同上書、pp.615-616
- 20 同上書、p.627
- 21 前掲『ゲーテとシラーの教育思想』、p.86
- 22 入澤宗寿『現今の教育』、弘道館、1915年、p.313
- 23 大村桂巖『教育学汎論』、教育研究会、1922年、p.283
- 24 前掲『ゲーテとシラーの教育思想』、pp.84-85
- 25 小西重直『学校教育』、1908年、博文館、p.398
- 26 文部省編『学制百年史』、1972年、p.329
- 27 同上書、p.332

- 28 谷本富『新教育講義』、六盟館、1906年、pp.457-458
- 29 巖谷小波『洋行土産』、博文館、1903年、p.161
- 30 同上書、p.164
- 31 同上書、p.165
- 32 是澤優子「明治期における児童博覧会について(1)」東京家政大学編『東京家政大学研究紀要 第37集(1)』、1997年
- 33 『みつこしタイムス 7巻3号』、1909年3月、pp.3-4
- 34 『みつこしタイムス 臨時増刊7巻8号』、1909年7月、pp.157-158
- 35 吉見俊哉『博覧会の政治学』、中央公論社、1990年
- 36 神野由紀、『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』、勁草書房、1994年、p.168

The Concepts and Practical Activities of Aesthetic Education in Modern Japan

KOIDE Chitoko

Abstract:

Aesthetic education seeks to refine human qualities such as sensibility and rationality. Previous studies have focused on people, such as Tomeri Tanimoto and Masatarou Sawayanagi, related to the study of the concept of aesthetic education. This paper examines the establishment of aesthetic education in Japan, focusing on its stages of development. First, the paper divides the development of aesthetic education in Japan into three stages, those of reception, exploration, and establishment, and describes the concept of aesthetic education discussed in each period. Second, it examines the contributions of an education specialist, Shigenao Konishi (1875-1948), and a children's story writer, Sazanami Iwaya (1870-1933), in the stage of exploration. Konishi wrote *School Education* and advocated the concept of aesthetic education in Japan, and Iwaya held an exposition for children with Mitsukoshi Department Store to exhibit the results of aesthetic education. Both of them experienced the German arts education movement and became aware of the importance of aesthetic education. Considering the progress of aesthetic education in stages, and examining both the establishment of its concept and its practical activities, the paper shows an integrated picture of how aesthetic education spread and took root in modern Japan.

Keywords: aesthetic education, exposition for children, modern Japan

概念と実践からみる近代日本の美育

小 出 治都子

要旨：

美的教育（以後、美育と称する）は、感性と理性を含む人間性を育成するものである。先行研究では、この美育概念を、人物を中心に考察している。そこで、本稿では時期を分けて美育の定着までの経緯を考察した。

まず、受容期・模索期・確立期という三つの時期にわけ、それぞれの時期にどのような美育論が展開されていたのかを論じた。次に、この時期区分から模索期を取り上げ、この時期に活躍した、教育学者の小西重直と児童文学者の巖谷小波の動きを考察した。

その結果、両名がドイツの芸術教育運動の経験から美育の重要性を認識したことにより、小西は『学校教育』などによって教育界にその概念を定着させようとし、巖谷は美育の実践の試みとして、三越主催の児童博覧会を企画したことが考察できた。

このように、美育の流れを時期区分し、美育概念の確立までの経緯と、その実践の試みを合わせて考察すると、近代日本における美育の定着を総合的に見ることができる。

